

『流砂』21号 付録

## ロシアのウクライナ侵攻

三上 治

2022年3月7日

### とうとうおっはじめたか、ロシアのウクライナ侵攻

2月25日（金）

(1)

期待を込めてということも含めてプーチンはウクライナ侵攻を我慢するのではないか、侵攻は踏みとどまるのではないか、と思っていた。彼はウクライナ侵攻という賭けに出るかもしれないと想像はしていたが、それは五分五分とみていた。プーチンは予想を超えて侵攻という賭けに出たのであるが、この行為にいかなる意味でも言い訳の余地はない。非難するのも馬鹿々々しいほどのことだ。これは明瞭に言うべきことであると思う。報道に隔たりがあるとか、アメリカ一辺倒だとか、批判や危惧が表明されているが、そんなのはことを明瞭にした上での話である。これははっきり言うべきことである。ロシアのウクライナ侵攻は明白な侵略戦争であり、僕らはウクライナの民衆の戦いを可能な限り支援すればよい。このことは反戦を望むということと矛盾しないのである。人々の停戦要求はロシアの戦争の停止であり、ウクライナの人々の抵抗の停止要求ではないからだ。双方の国家間対立として戦争があって双方に要求する停戦が今回の停戦の要求ではない。これはあくまで侵略したロシアに対する停戦要求であり、ウクライナの人々の抵抗支援は前提なのである。こ

の点は明瞭にしておくべきことだ。

制裁も含めたロシアの侵略行為への対応の問題はいろいろあるにしても、中国の外相の、理解するという擁護は各国の発言の中で最低である。とても聞くに耐えないものだ。中国の強権的政治体質を露呈させているだけと言える。人々の反応というか、評価は様々であるだろうが、僕は何よりもプーチンのロシア統治というか、プーチン政治は僕らが予想するよりも、深刻な危機的状況にあるということを直観した。どんな経緯をたどるにしてもプーチン政治の終わりの開始だと予測する。その意味でこの蛮行に反対するロシアの人々の動きに何よりも注目している。それだけがこの問題を解決していく道であろうとも思えるからだ。ウクライナの人々には深く同情する。そして、どんな形であれ抵抗を続けることを願うが、支援をしたい。義勇兵募集とあったが若かったら応じたと思う。軍事経験がなければ足手まといにしかならなくとも、精神的支援にはなるだろうし、それは大事なことである。

## (2)

あれはまだ、中学の三年生だったと思う。学校の帰りにイギリスとフランスのエジプト介入(スエズ運河支配)に反対するナセルの武装抵抗の報道を知り、深い衝撃を受けた。そして、イギリス・フランス帝国主義への批判とアラブ革命に共感した。同じ年のハンガリーでは国内における政治改革にソビエト(旧ソビエト)が軍事介入し、これに対する国民の武装抵抗があった。当時のハンガリー首相(ナジ)がソ連軍に拉致され抵抗する声をラジオで聞いて興奮した。俺も同じ事態になったら武装抵抗し、戦車に火炎弾で向かっていけるだろうかと思像した。

このハンガリー動乱は戦後のソ連圏(社会主義圏)の解体と崩壊の始まりだった。敗戦を契機に拡大したソ連圏(社会主義圏-社会主義共同体)の解体と崩壊の始まりであり、これはベルリンの壁の崩壊まで続いた。このハンガリー国民に対する軍事加入(軍事的制圧)は社会主義国家に対する帝国主義国家の策謀の排除、あるいは社会主義の自衛の行動という形で正当化された。ソ連(社会主義国)サイドで。この事件を契機にソ連圏(社会主義圏)への疑念と批判が生まれたが、ソ連の行動を正当化する考え(社会主義の防衛・自衛)というのは左翼では強かった。社会主義圏が崩壊するとか、ソ連が解体するというこ

とは想像できない絶対的体制だという意識は強かった。ソ連の社会主義については1953年のスターリン死後、その批判が始まるが、まだ、社会主義ソ連という考えも強く、ソ連の行動を擁護する考えも強かった。例えばサルトルはソ連のハンガリー侵攻を擁護していた。また、社会主義国の核兵器はきれいな兵器であるとか、社会主義国の戦争は正義の戦争だという言説がまかり通っていたのである（ある時期、日本共産党はそういう言説を取っていた）。新左翼という存在はあり、こうした言説に批判的だったことはあるが、それは少数派だった。

ここで指摘しておきたいことはソ連圏（社会主義圏）の崩壊と解体は、当時のソ連の権力者が言っていたような帝国主義国からの介入や攻撃で起こったのではないということである。具体的に言えばNATO軍の介入や攻撃によってそれは崩壊したのではないということである。当時、社会主義圏ではワルシャワ条約があったが、NATO軍がソ連圏の内部国の反権力・反体制的動きに介入し、ワルシャワ条約軍を攻撃したことはないのである。ソ連圏（社会主義）の崩壊はその内での体制（権力構造、統治権力）の矛盾で起こった。つまりは強権的で専制的な権力構造の矛盾の展開がもたらしたのである。このことはよく知っておかなければならない。旧ソビエトの崩壊は、帝国主義からの攻撃として社会主義圏の諸国での内乱（各国の権力と旧ソ連権力への反乱）が起こったのではなく、社会主義圏の諸国に対するソビエト権力と各国の権力の専制的・強権的支配に対する国民（市民・地域住民）の抵抗・反乱によって起こったのである。社会主義権力（「プロレタリア独裁」の統治する国家）が専制的で独裁的であること対しての反乱として起こったのである。ソ連はこれに対して軍事的介入をし続けたのであるが、結局、敗北しソビエトの解体と崩壊になった。

### (3)

社会主義圏が次々と崩壊し、ソ連も崩壊したのは統治権力のあり方をめぐる問題であった。だから、どういう統治権力を作るかが課題であったし、それに成功しなければ政治的不安定を抱えることになる。社会主義権力（「プロレタリア独裁」の統治する権力、強権的・専制的権力）の後にどういう統治権力を創るかは旧社会主義国家の課題であった。プーチンはイデオロギー的に社会主義権力というイデオロギーはとらないが、強権的で専制的な国家権力を存続させた。エリツインの政権もあったから、旧ソ連の統治権力をイデオロギー抜きで再生、保持してきたと言うべきか。彼は国家主義を基本としており、旧社会主

義圏（社会主義共同体）を自己の勢力圏にとどめおきたいという考えを持っている。特にソビエト連邦国家の内の旧ロシア帝国の部分（ベラルーシやウクライナ）を組み込もうとするロシア帝国の復活を志向している。中国では社会主義を掲げているが、徹底した強権的体制を駆逐し、人々の意識や意思を抑え込むことで安定しているように見える。それは批判や政治意思を社会の深部に閉じ込めているだけである。抑え込んでいるだけだがそのようにみえる。

プーチンは習近平と似ていると言える。違う点は、プーチンは反体制派というか、そういう部分を抱えていて政治的に不安定であるということだ。プーチンは強権的に自己の反対派などを抑え込み切れではない。ここにプーチンはイデオロギー的支配力を持っていない分だけ、その国家主義は統治力としては弱い。プーチン個人の政治意志力というよりは基盤ということだが、そこは不安定なのだ。僕はここにプーチンが戦争に乗り出す大きな契機があると考えられる。プーチンの秘密と言っているが、その国家主義の弱さ、不安定さがあるように思う。

戦争はある段階までは統治権力を強める。どのような理由であれ、強い排外主義とナショナルな契機を生み、統治権力を強めるのである。統治権力の危機を一時的にせよ延ばさせる。戦争を形成する条件は人々が他（他の国家あるいは共同体）に対して恐怖を持つことであるが、その共同意識を持つことである。この恐怖の意識はいろいろな形で培われる。例えば、9・11はアメリカの人々に衝撃と恐怖感をもたらした。これは9・11のビル攻撃の規模と正体不明さが恐怖感を生み出したのだが、時の政府（ブッシュ大統領）は戦争に誘導したのである。もともとはこの攻撃は他の国家から仕掛けられたものではなく、政治グループから仕掛けられたものだから、治安的に警察的に対応すべきことだった。それを戦争にしたのはブッシュが戦争を望んでいたからである。ただ、ここで見ておくべきは、ここには人々の恐怖の共同性があり、それをブッシュは政治的に利用した。9・11で生まれた恐怖の共同性を、アフガニスタン戦争やイラク戦争まで誘導したのだが、その基盤があったことは見ておいていい。

#### （４）

プーチンは戦争の動機にNATOの拡大によってロシアの安全保障が脅かされると言う。これは一般的な国家危機論である。国家主義者としてのプーチンはそ

う思っているのかもしれないが、信じがたい。これは一般的なお話と言うか、通りのいい言葉であるが、少し立ち入って検討すれば根拠がないことがすぐわかると思える。アメリカの他国の追い込みかたから、NATO 拡大がロシアの危機になるということを解していることはあると思う。アメリカは外交解決を口にしてはいるが本気で外交解決する気はなかったことも関係する。しかし、先のところで書いたことだが、かつて社会主義圏内部の反乱にロシア軍が戦車で抑圧に出ても、NATO 軍が介入参戦せず、NATO 軍との戦争にはならなかったことを熟知しているのではないか。NATO の拡大がロシアの安全保障上の危機になるというのは口実にすぎないことは明瞭だと思う。ただ、かつての同胞国が統治権力の変革（例えば、専制的・独裁的国家から自由で民主的な国家に変革される）が自国統治権力の危機になる。そういう波及があるかもしれない。だが、これは安全保障上の危機とは違うし、軍事的解決されるべきことでもない。

プーチンの統治権力は反対派が強くて不安定である。反対派が多いという危機感がある。反対派を強権的に抑え込んでいる不安定感があり、彼の恐怖がある。この解決は国民の支持を得る統治権力へと変革するしかない。彼は強権化し、専制を強める形でしか対応できないからこれは悪循環する。独裁政治の宿命だが、彼はそこを脱し得ない。

プーチンは強権政治が統治権力の弱さを脱することにならないことはわかっているし、社会主義権力がなぜ崩壊したかも熟知しているはずだ。ただ、彼は旧社会主義権力をイデオロギーだけ抜いて再生させ、保持しているから、深まる危機に対して、かつてなら社会主義に対する攻撃としたものを、ロシア国家への攻撃として使い、対応しようとする。これは NATO の拡大がロシアの安全保障上の危機だという場合の中身である。かつてなら社会主義への資本主義からの攻撃としていたものを、ロシアへの国家攻撃に変えてやっているのである。あるいはウクライナ政権をナチズムとし、ナチズムと戦争しているという宣伝すらする。プーチンの方が専制的で独裁的なネオナチ政権であって、ウクライナ政権がネオナチなんて誰も思わない。こういう宣伝はロシア旧社会主義圏の諸国に軍事介入したときに使われた。ロシア国民やナチズムとの戦争でソビエトに加担していた人々にはそれなりに効果のある言説のように思えた。でも旧ソビエトの統治権力がナチズムと相似形であり、戦争がそれを覆い隠していただけであることが明らかにされた現在ではこういう宣伝は通用しない。

ここで実はプーチンは自己の統治権力の危機を、国家危機にすり変えるとい

うことでやっている。プーチンは自己の統治権力の弱さ、そこからくる恐怖を、NATO の拡大による恐怖（軍事的に侵攻されるかもしれないという恐怖）にすり替えている。自己の統治権力の弱さを、他国に対する戦争による国民の統治権力の支持で補おうとしているのだ。そのためには他国（NATO）からの脅威をでっちあげ、そこから対抗的戦争の口実を生み出し、戦争まで仕掛けていくのだ。

このプーチンの政治的策術はプーチンを支える政治的支持層（官僚）や軍などには一定程度は共有されると推察される。何故なら、彼らはプーチンの統治権力の危機と国家権力の危機を重ねられる場にあるからだ。彼らは国家危機（プーチンの言う安全保障上の危機）を危機として受け取れる立場にあるからだ。他の国家からの脅威というのは国家権力の立場にあれば、それは受け取りやすいからである。

それなら国民はどうだろうか、多分、ロシアの国民はプーチンの恐怖感を共同の恐怖感としてはいないように思う。すり替えをわかっているとも言える。ロシアの国民はウクライナ問題に関心が薄いと伝えられるが、多分、これは正しいのであろう。国民はウクライナが NATO に入ればロシアの安全保障が侵される、つまりは戦争状態が生まれるなどとは思っていない。ウクライナのロシア系住民の権利保護という点では心動かされることもあるだろうが、そこにある政治的工作もわかっているはずだ。ロシア国民は NATO 拡大の脅威、そのための自衛、そのための戦争を必要とは思っていない。プーチンは安全保障の危機ということでナショナリズムを喚起しようとするのだろうが、その心的基盤をロシアの民衆は共有していないと思う。この推測は間違っていないと思う。これはいずれ露呈すると思う。そして、どんな形になるかわからないが、ロシアの民衆の中から反戦の声は広く出てくると思う。それが戦争の続行をとどめる力になると思う。その可能性は高い。

## (5)

アメリカの動きについてであるが、バイデンはプーチンを戦争の方に追い詰めていることはある。これは伝統的なアメリカのやり方である。アメリカの民主主義は戦争を媒介にしてある。戦争の否定を内包する民主主義という現在の課題の民主主義とは相容れないところがある。戦争と民主主義は矛盾するし、非戦と民主主義は両輪のようなものとしてある。それが現在の民主主義だ。戦争とセットになっているアメリカの民主主義の限界とそれを超える課題を提示

したのは戦後の歴史だ。社会主義権力が崩壊したのはアメリカの民主主義の力ではない。冷戦の結果であり、アメリカはアメリカ民主主義の勝利とうぬぼれただけだ。アメリカの権力は民主主義権力であるという幻想を暴いたのはトランプの登場だったが、それに勝利したバイデンは古い戦後のアメリカ民主主義を再確認したにすぎない。

NATO へのウクライナ加盟など NATO 拡大がロシアに国家不安の口実を与えることになっていることは多くの人が指摘するが、それはあると思う。プーチンが口実に使っているだけであるが、そういう限界はある。アメリカの民主主義は対抗的民主主義であり、限界のあるものだ。自立的な民主主義ではない。非民主的な統治権力を敵対視し、それを、戦争で民主化させるということもやりかねない。これは統治権力の民主主義への転換を統治権力の歴史性を踏まえてやる、つまり内在的に展開していく過程を無視する傾向を持つのであり、戦争でそれを押し付けるということをやることがある。ここは民主主義が統治権力の歴史性を踏まえて、言うなら統治権力の支配をめぐる闘いの中でどう達成するかということで、一番難しい部分だ。ここでアメリカ民主主義は問題というか欠陥がある。これは僕らが見ておかなければいけないことだ。

## プーチンの狂気の行動に驚きながら

3月3日（木）

プーチンが核の使用をちらつかせ、威嚇をしていることは驚きだったが、原発の攻撃までやることはさらなる驚きである。正確な情報かどうかわかららないが、僕の家で購読している新聞には原発砲撃という報道があった、プーチンは今度の軍事侵攻で原発をどうする気なのであろうか、彼は原発を押さえ、ウクライナ政権を屈服させるための人質のように原発を使う気か。正確な情報がわからないから憶測で語るしかないが、この軍事行動で原発がどうされるのか、どう使われるのか、核兵器の使用ともども大変気になることだ。原発と戦争ということは誰も考えないで済んできたことだろうが、僕らは新しい事実というか、事態に直面している。戦争というのは何でもありだということになるのだろうが、原発事故の恐ろしさを見てきた僕らは事態をよく見ておかなければならないし、理由の如何に関わらず原発に手を出すなと言いたい。これは、何をやるかわからないという恐怖が独裁的（専制的・強権的）な政治家や国家権力に抱く恐怖であり、僕らはそれを今、プーチンの言動に見ている。

ロシアのウクライナ侵攻から早くも一週間が過ぎたのであるが、僕がここでまず感じることはウクライナの民衆がよく抵抗しているということであり、短期でウクライナ政権を挿げ替えるというプーチンの野望は頓挫したということである。プーチンは次の手立てを考えているのだろうが、短期決戦で軍事的に抑え込みということは難しくなっているのだろうと推察される。軍事力の非対称的差は、爆撃などでは大きく作用するが、人が決定的になる地上戦では、この軍事力の差は機能しないと思う。

プーチンの軍事的侵攻は文字通り侵略であり、このことは明瞭にしておかないといけない。NATOの拡大とか、ウクライナ政権の動きにロシアの側の戦争を誘発した原因があるとか、情報が偏っているとか、いろいろの見解が流布されているが、ロシアの侵略ということのをあいまいにさせてはならない。何故、こんな見解が流布されるのかということと二つの理由があるように思う。一つはプーチンの今度の軍事侵攻がなぜ起こされたのかという認識というか、それがつかみにくいということがある。確かに、NATOの拡大とか、ウクライナ内部のロシア系住民との軋轢とか、プーチンが口実にしている理由らしいものはある。こ

れは情報としてあるのだが、それを信じるのではなく、こうした言説を検討してみれば、理由ではないことがすぐわかる代物だ。もう一つは戦争が帝国主義戦争としてあるという観念があって、これはかつての時代では大きな力を持ってきた。この経済過程に原因を置く戦争についての理解は一面的であり、第二次世界大戦後はここから戦争を全面的に理解できないということが続いてきたのだが、これが影響している。

第二次世界大戦後の戦争にはアメリカの戦争とともに、社会主義圏（社会主義共同体）の内部で起こった戦争が多くあったのだが、これがきちんと総括（対象化）されずにきたことがある。これは今度のプーチンの戦争をつかまえる妨げになっている。**これは主に統治権力の問題として起こった**。戦後の社会主義圏（社会主義共同体）の各国で起こったのは社会主義権力（スターリン主義的権力）への反抗として起こった。その過程で旧ソ連は社会主義圏と言われた諸国に軍事侵攻をした。ハンガリーからチェコやポーランドなどすぐに想起される。この問題は社会主義圏と言われた諸国とソ連の関係が、帝国主義国とその支配下にある国家と同様の関係であったということと、旧ソ連を含め社会主義国家が独裁的・専制的権力形態をとっていたということにある。ここでの反乱は独裁的・専制的権力からの脱却を目指すこととして起こったのだが、旧ソ連はそれに戦車を差し向けたのである。プーチンは旧ソ連の立場をロシア帝国の復活（かつての社会主義共同体からロシア帝国へ）という形でその反動的再編を目指している。そして、彼は旧ソ連の独裁的・専制的統治体制を国家主義で保持することをやってきた。

彼は旧ソ連が当時の社会主義国家に対して行った軍事行動を、形を変えて行っていると言えるのであるが、そこにあるのはロシア帝国の復活であり、専制的、独裁的統治の保持であり、拡大である。プーチンはかつてのように帝国主義からの社会主義の防衛、あるいは自衛という言葉は使わない。国家危機とか安全保障の確保、ロシア系住民の権利保護などを使う。しかし、ロシア帝国の復活、あるいは独裁的・強権的統治の拡大という意味で旧ソ連の権力形態の保持を図り、そのための戦争をも辞ないということに似ている。そう言えると思う。確かにプーチンは国家主義者であり、ロシア民族とウクライナ民族との一体性に執着している点でナショナリズムの信奉者かもしれない。彼が独裁的・強権的政治家であり、好戦的なのはそこからきていることを見ておかなければならない。

僕は前にプーチンの統治（独裁的、強権的政治）の危機が、僕が想像するよ

りも深い形で進行しているのではないかと書いた。僕の直感というか、想像は当て外れでないと思う。ロシア内部の反戦機運は静かに拡大している。情報を遮断し、軍事統制を強めているがそんなことで収まるはずはない。ウクライナの市民や地域住民の抵抗とロシアの市民や地域住民の動きはまだ分断されているが、契機があればどこかで連帯の動きが鮮明になると思う。これはかつて旧ソ連が社会主義国に戦車を差し向けた時とは違っていることだ。

## わかりにくい戦争というべきだ

3月6日（日）

そこまでやるか、という思いのするロシアの原発攻撃である。戦争になれば何でもありになるというのは歴史的には経験ずみのことだが、それにしてもロシアの原発攻撃は想定外のことだった。プーチンには何をやるかわからないという独裁者に対する恐れは以前からあったが、本当にそれを目のあたりにした思いだ。テレビに映るプーチンの表情や喋りを見ながら、こちらは言葉が凍ってしまう。戦争の指導者を見ながらの感想としては初めての感想と言っているものだ。ロシアのウクライナ侵攻から早くも10日間を過ぎたが、いろいろのことが浮かび、過ぎ去り、頭は混んとしている。行方はわからない。感想というか、行方について何か語ろうとすれば切れ切れの感想ということにしかない。だから、何かを語ることには、それを押しとどめるものがあるのだが、でも、何かを語り置きたい衝動もある。

今回のロシアのウクライナ侵攻は侵略戦争であり、侵略戦争が絶対的な悪であるように絶対的な悪行である。ここにはどのような弁解も立ちようがないと思う。このことは何度も語るが、明瞭にしておきたいことだ。このことを反芻しながら、頭の中をよぎるのはこの戦争にはよくわからないことがあるということだ。プーチンが戦争に踏み切った動機には今一つ、わからないところがあるということだ。このことは僕の頭の片隅から離れない。やはりこのことを知

りたいと思う。これはプーチンの戦争の動機を知ることによって自分の怖れを解きたいということもあるが、戦争をやめさせる契機が発見されるかもしれないという思いがあるからだ。戦争について僕はいろいろと考え、研究してきたが、その中でいつも引っかかっていたのは戦争の動機というか理由はなかなか発見できないということだ。例えば、レーニンの帝国主義戦争論がある。これは世界戦争を解明した名著であるとされてきたし、これをテキストにして多くの戦争の分析や解説がなされてきた。ここではあまり詳しく語らないが、僕はこのレーニンの戦争論を、現在の戦争の解明には何かが欠けていると語ってきた。現在の戦争の分析につながる何かが欠けているということだった。マルクスやレーニン、あるいは毛沢東とは違った戦争論が要るのだというようにも語ってきた。

ロシアのウクライナ侵攻を見ていると、その理由というか、動機が見出せないという思いは続いている。確かにプーチンはNATOの東方拡大がロシアの安全保障の危機になっている、つまり、そこに軍事的危機が発生していると語る。あるいはウクライナ東部でのロシア系の地域住民が危機にさらされ、その自衛のためと戦争の理由や動機を語っている。これはありきたりの口実というか、説明と言えよう。でもこれは少し深く検討すれば、本当の動機というか、説明ではないと思える。ウクライナがNATOに加盟したところでそこでロシアの国家危機（軍事的危機）が発生するなど誰も思えないし、そんなことはプーチンには百も承知のことだろうと思う。ただ、ウクライナに自由で民主的な政権が成立すれば、それがロシアに波及するかもしれないという意味でのロシアの現政権には危機となることはあり得る。それが安全保障上の危機、軍事危機の背後にあるものならわかる気がする。しかしこの危機は軍事的に解決をしてはならないものだ。アメリカは逆の意味でやっているのだが。

プーチンには戦後の社会主義圏（ソ連圏・あるいは社会主義共同体）が冷戦（NATOの対抗）によって分割・解体されたという認識があって、違う形の旧ソビエト国家の回復（ロシア帝国の回復）の野望があると言われる。旧ソビエト国家の中でウクライナ・ロシア・ベラルーシはソビエト連邦に属し、旧ロシア帝国では小ロシア・大ロシア・白ロシアとよばれていて、ウクライナには国家的な執着が強いと言われる。社会主義圏の解体とともにソ連邦も解体されたのであるが、この原因をNATOに帰し、ロシア帝国の復活を志向している。社会主義圏の解体はNATO（西欧資本主義）との対抗と策謀で改定したのではない。社会主義権力の矛盾と自壊の結果である。プーチンの社会主義圏の自壊の認識には疑問が残るが、彼のロシア帝国復活はわからないではない。つまり国家主義

者としてプーチンは生き残り、ロシア国家を統治（支配）してきたのだからである。でも、ここからだけでは、なぜ、彼が戦争に訴えるのかはわからないという思いも残った。

僕はプーチンに関する他者の知見から教えられながら、彼がそのイデオロギーは清算しても、社会主義権力の統治（スターリン政治、権力形態）は学び、踏襲してきたのだということを理解できた。ロシア帝国の復活の野望の背後に、かつての社会主義的権力の様式を保持してきたこと、そこに今回の戦争への秘密はあるように思えた。ここからは僕の政治的想像力によることだが、書き置けば、二つぐらいのことがある。一つはプーチンがかつての社会主義圏の諸国の変革（社会主義権力の解体）に際し、NATO（西欧資本主義国）は旧ソ連の軍事行動に手を出してはこなかったことを熟知していること。二つ目は旧ソ連の崩壊後のロシア国家を国家主義的に保持してきたことである。イデオロギーなきままに専制的・独裁的権力を保持してきたのだ、それならば、なぜ、戦争が出てくるのかということがある。多分、秘密はプーチンの国家主義的な統治様式（権力様式）がロシアで十全の支配力を持っていないことにあるのではないか。ウクライナなどの周辺国の統治形態の変革が、この面で自国に及ぶ危機を敏感に感じているのではないか。つまり、戦争はロシア国家に対する外部の国家的動きにあるのではなく、どうやら、ロシア国家の統治危機という内部問題にあるように思う。ふつうは国家に対する外部要因に対する反応として戦争の動機や要因が考えられる。でも今回はそこには見出しにくい。戦争の理由と動機の不明さは、それがプーチンの政治（権力）の内部にあるように思える。つかみがたさである。でも、ここに糸口をみれば、僕らがこの侵攻の行方を考える場合の手がかりを得るように思える・ウクライナの人々の抵抗とロシアの人々のそれへの連帯が、この戦争の解決の決め手になると考えるのもそこに根拠がある。

『ウラジーミル・プーチンの大戦略』（アレクサンドル・カザコフ著・

佐藤優監訳・原口房江訳） プーチンのイデオロギーと政治哲学

（1）

ある新聞の社説に「誰も戦争を信じなかった2月」とあった。その冒頭にはこうある「戦争を予見する人はほとんどいなかった。起きないと誰も信じていた」。僕もそうだった。期待も込めてだが、プーチンは我慢するだろうとみていた。これは見事に裏切られたというか、人々の予想に反してプーチンはウクライナに侵攻（侵略）をした。言いようのない怒りとウクライナの人々への同情が起こったが、その中で僕が思ったことは二つのことだった。権力者というか、政治家の決断で戦争が簡単にやれるんだ、ということが一つだった。戦争なんて簡単にやれる時代ではないという意識が心の何処にあったのだが、これが吹き飛ばされた、ということだ。ヒットラーやスターリンなんて、あるいは天皇だってこんなだったのだと思い起した。権力や政治の怖さを思い知らされたとでもいうべきか。

もう一つはプーチンの統治（政治）がその見かけとは別に相当危機に直面していて、プーチンはそれに恐怖を抱いていて、一種の賭けにでたな、ということだった。この戦争の帰結を超えてプーチンの終わりがはじまった、ということだった。これは一種の直観であるが、間違っではないと思う。プーチンは引くことも進むこともできない地獄に直面していて、そこがこの戦争の厄介なところだと思う。今度の戦争はNATOの東方拡大とか、ウクライナでも民族紛争とかが言われるが、それはプーチンの口実ではあるが、本当の戦争の理由はそんなところにはないと思う。

今度の戦争はロシアのウクライナ侵攻（侵略）というのは明白な事柄なのであるが、その理由はつかみ難い。NATOの拡大がロシアの安全保障上の危機をもたらすとはこの戦争の口実であり、理由と考えられるが、これは国家が現実的に侵略なりの危機（外部からの危機）に遭遇するという現実性を感じさせられるものではない。プーチンの統治（政治）に危機があって、それを外部に転嫁させるために戦争を始めたという想像的な推察の方が戦争の理由の発見に近づけると思う。こんなことを思いめぐらして、そういえば、僕はプーチンがどんな考えを持っていたのか、知らないで来た、と思った。これは習近平についてもいえる。プーチンが国家主義的で独裁的な政治家であるとか、ロシア帝国の復権を目指している、というのは知見として知ってはいたが、それ以上のことは知らないで来た。これは習近平についてもいえる。今度のウクライナ侵攻について中国はロシアの行動を理解できるという擁護をしたのだが、この両者の接近に何があるのか、わからない。かつてなら社会主義権力の連帯というこ

とが考えられたのだろうが、今は、それはない。以前にウイトフォーゲルが『東洋的専制』として描いた水力社会の政治（統治）の同一性ということを想起したが、これはちょっと疑問もあると思ってきた。中国と旧ソ連の独裁的権力をアジア的生産様式下の官僚制として析出した水力社会論は確かに興味深い。時間があれば読み直したいとは思っていた。本箱の片隅にあった『スターリンニズムとは何であったか』（リ・バンチョン）を引っ張り出したて読んでみたソ連邦崩壊後に初めてソビエト社会を分析したこの本は面白いが、プーチンの世界とは距離がある。スターリンニズムとプーチンの思想は独裁的権力観として類似しているとは思えるが、これには相違もある。

いずれにしても、プーチンの世界というか、そのイデオロギーや政治思想を明確にした知見はなかなか見当たらない。こうした中で、『ウラジーミル・プーチンの大戦略』（以下、『プーチンの大戦略』と題された本書はプーチンの世界を知るための適宜なものである。著者のアレクサンドル・カザコフは「プーチン党のイデオログ」と言われているが、この20年にわたってロシアを統治してきたプーチンの思想を析出している。これから、プーチンの世界を析出した本は続々と出てくるのだろうが、今はこれが最適なものと思える。

## （2）

『プーチンの大戦略』は三部からなっている。第一部は「ローマとビザンツの間で」、第二部は「古きファイルより」第三部が「プーチン党のイデオロギー」である。第一部は全体的な形でのプーチンのイデオロギーと政治哲学の析出となっており、第二部はこの20年間のプーチンの考えの遍歴を帰したものと見える、これに対して第三部は具体的に、ということは個別的に彼のイデオロギーや政治哲学を分析し、析出したものである。どちらから読んでもいいのであるが、三部から読むというのもわかりやすいかもしれない。

プーチンは1952年生まれであり、長く、KGBで対外諜報員を務め中佐で退職した。ソビエト連邦国家の崩壊後にエリツィン政権に参加し、1999年の暮れにエリツィンから大統領代行を指名された。2000年の初めに大統領になってから、大統領でなかった期間もあるが、ほぼ、20年間、ロシア国家の権力の座にあった。彼の政治は登場過程からみれば屈折もあるが、権威主義的傾向（独裁的傾向）を強めてきた。政敵の投獄や弾圧、報道に対する脅迫や抑圧、自由で公正な選挙の欠如などからプーチン下の政治を民主主義的な政治とは認められないできた。プーチンは独裁的政治家であり、権威主義的政治家というのが一般の認識だった。その意味ではプーチンは何処かスターリンを連想させるのだが、スターリンは明確なイデオロギーというか、政治哲学があった。マルクス主義というか、「プロレタリア独裁」による統治というイデオロギー、あるいは政治哲学があった。これ（社会主義国家論）に裏付けられて国家社会主義

と世界革命をめざすものスターリンニズム（起源はレーニン主義）だったが、プーチンにはそれはない。スターリンニズムが実現した社会主義圏（ソ連圏）とその中核だったソ連邦（ソビエト国家）が解体と崩壊の後に彼は政治的に登場したのだからである。

この社会主義圏（社会主義共同体）とソ連邦の崩壊、一言でいえば社会主義国家の解体と崩壊はその統治権力の矛盾としてあった。冷戦に負けた結果ではない。社会主義権力の矛盾が権力解体になったのである。これについてはいろいろの説があるが、プーチンはその後の国家をどう構築するかという中で登場したのであるが、スターリンニズムの再生、あるいは継続を目指したのではなかった。

### （3）

社会主義圏（ソ連圏）の崩壊とソ連邦の崩壊の後にロシアではエリツインが登場し、プーチンはここに参画するのだが、彼は長くロシアを支配してきた伝統的左翼を継承するのではなく、保守主義の立場に立った。保守主義とは経験をよりどころとしながら、政治（国家統治）を志向する立場であり、これは理念（イデオロギー）によって政治を考える進歩派、革新派とは違う立場である、実践経験と常識に立つ立場であるといえようか、これは「革命的理論なしに革命運動なし」といったレーニンの言とは対極にあるものであり、理論の拒否ということでもある。これはプーチンの政治思想がわかりにくいということであり、プーチンは保守主義者として登場し、保守政党として位置づける政党（ロシア統一党）を組織する。

保守主義は一般に抵抗の党というよりは権力の党という性格を持つが、保守主義にもいろいろあり、それは理念（イデオロギー）を必要とする。本書ではロシア統一党にはイデオロギーがないという非難が起こったのだという、このときにでてきたのが「プーチンのイデオロギー」ということである。これは「ただしく、かつ完全な答えはこうあるべきである。＜統一ロシア＞のイデオロギーは、その最も重要な源泉として、ウラージミロビッチ・プーチンの政治哲学を有している」（295 ページ）。要するにプーチンの政治哲学が統一ロシアのイデオロギーであり、統治ロシアのイデオロギーがあり、その代表としてプーチンがあるのではないということだ。これはプーチンが大統領として権力の座にある過程で実践的方針がプーチン哲学であり、それがロシア統一党のイデオロギーであるというわけだ。これは党のイデオロギーというものは個人を超えた者としてあり、その共有で党は成り立つ。ロシア統一党の成員はプーチンの政治哲学を自己の政治哲学にするというわけであるが、ここには権威主義（独裁主義）の根拠があると考えられる。古い言葉で言えば個人崇拜といってもいいが、プーチンの政治的性格が垣間みえる。ただ、プーチンの政治哲学は保

守主義あり、イデオロギー化や理論化に消極的であることもあってわかりづらいところがある。それはこの著者もそれはわかっているようだ。そうであればプーチンの政治哲学とはなにか。

「ストループはそれをこう定義している。国家を国家して存在たらしめる法則は告げるのだ。一健全で力強い、すなわち法的に専政的であるいは主権を有しているだけではなく事実、己に拠って立っているすべての国家は、巨大であることを欲する、と。そして巨大であることは、必然的に力を獲得することを意味する」（31ページ）。ストループとはロシアの古い思想家であり、ボルシェビキニ反対していた。彼が寄ったのがこの国家観だというのが著者の指摘だ。プーチンは国家主義者であり、国家主権主義者であるという指摘あるがうなずける。この国家観は国民主権に基づく国家というのとは明瞭に異なるものである。国家主権というのは国家の支配エリート（官僚）の国家支配、つまり専制的支配を肯定する考えである。

国家権力の性格についていえば自由や民主制が考えられてはいない。プーチンも民主主義をいうが彼の国家主義は自由や民主制を欠落させたものである。しかし、ここで注目すべきは、国家は巨大であることを欲するという点だ、そして力を獲得するという点だ。別の言葉で言えば国家は軍事力を欲するし、他の国家の軍事的支配をやるということである。戦争（他国の暴力的支配によって自国の志を承認させる）は国家的属性としてある。経済的欲求（例えば市場支配）が根底にあるというのが、レーニンの考えだが、それ以上に国家自身の欲求としてある。この国家欲求は戦争の違法性、侵略戦争否定として現代的にあるが、プーチンの国家観（戦争観）ではそれは無視されている。古典的な国家観（戦争観）を持っている。プーチンの国家観に支えられてプーチンの大戦略というものが析出されている。大戦略とは国家統治の戦略のことであるが、これは国家統治によって国民繁栄をとということである。例えば、そのための社会主義権力を創出するというのが大戦略として考えられたものとしてあるプーチンの場合は経済的な開放や変革、あるいは政策は間接的なものとしてしか考えられていない。それよりも国家統合の軸に軍事戦略が据えられている。これは国家統治が発展していく方向が軍事的支配力の発展の方向に構想されていることだ。

これはプーチンの政治が内政よりも外政に中心が置かれているといことだ。彼の政治の軸が軍事（軍政）に置かれていることはそこによるのだと思える。この本で面白かったのは彼のの大戦略ということは経済問題でのオープン性とは違った軸であるから、隠されたものであり、大いなる神秘と言われたりするという指摘だ。プーチンの政治がなかなか見えないないということは彼のの大戦略が国家の力の獲得と行使にあることだとすればわかる。軍事戦略というのは公

開的ということとは反対に秘されるものからである。軍事が中心置かれる政治は帝国主義政治といわれる。プーチンはロシア国家の統治としてロシア帝国の復活を掲げる。それはプーチンがネットワーク原理に基づいて組織された新しいタイプの帝国の建設とりかかったとされることでもある。

これについて解説で佐藤勝はこう書いている。「レーニンが考えていたような帝国主義は、国民国家が領域的拡大を図るもので、それは資本の要請に従って国家が拡張しているだけで、何の理念求められない。帝国主義国家は必然的に宗主国と植民地に別される、そして宗主国の一般国民、植民地の二級国民に国民を区別する。これに対して、帝国は理念を共有するネットワークだ。他国に従属せず、主権国家として生き残ろうとする国々と緩やかなネットワークを形成していく、（中略）これが現代的なロシア帝国の拡張だ」（453-454ページ）。

プーチンの戦略としての帝国建設背後にはロシア大国（強国）化という秘められた戦略がある。これは秘されたものだったが、これは帝国主義的な力の支配と

不可分の関係にある。チェチェンの軍事的抑圧などその事件はあったが、今回ウクライナ侵略でそれは一気に露呈したというべきか。